

『古代ロマンあふれ、万葉の故郷である冬の奈良県桜井市を訪ねる』
研修旅行に参加して

井上 京子

十二月十一日(火)、三十名の会員の研修への熱い思いを乗せ、バスは近江八幡を出発しました。行先は、奈良県桜井市。大神(おおみわ)神社・今西酒造・大宇陀松山地区重要伝統的建造物群保存地区です。

大神神社は、大和盆地の東南に位置し、古来より、御祭神大持主大神(大国主神)の鎮まりますお山「神体山」として仰がれ、本殿を設けず、拝殿が特に重要視されてきたそうです。また、拝殿と禁足地(神体山のうち特に神聖な場所)とを区切る場所に立っているの「三ツ鳥居」も拝見しました。お山を仰ぎ、神聖なこの場に立つと古来から人々が世の幸福を祈ってこられたのだと、感じる事が出来ました。自然の素晴らしさを感じ神聖な気持ちでいますと、自然とおなかも減ってまいりまして、お楽しみみのランチタイムです。



桜井の街中を歩いていくと、レンガ造りのおしゃれな建物がありました。『旧京都相互銀行桜井支店』をリノベーションしたレストラブル・フルドヌマンでフレンチを楽しみました。

午後は、城下町として色々な時代の影響を受けながら作られてきた、「日本の家屋の博物館」と言える、大宇陀松山地区伝統的建造物保存群地区を見学しました。いずれの地でも地元ガイドの皆様が、温かく笑顔で丁寧に案内してくださったことが心に残ります。

初めての研修旅行。バスの中での、ドキドキの歴史クイズと鳥居のお話で知識を、地元ガイドの方から地元愛と歴史の素晴らしさを教えていただき、実り多い一日となった桜井路でした。

ガイドさんの趣味のコーナーです

私の趣味

伴 佳夏

私が卓球を趣味として始めたのは、五十歳半ばの頃で毎週一回の練習日がとても楽しみでした。運良く、滋賀県より「ねんりんピック」に二回出場した良き思い出があります。その後も卓球を楽しみながら、「俳句」も始めました。切っ掛けは、中村汀女の『俳句とエッセイ』に出会い心を打たれたからです。

スポーツが「動」なら「静」も私には必要なのではないかと考えたのです。汀女さんの影響を受けて以来、愚作を詠み続けて今日に至っております。

私は日常生活からの日記の代わりに、その日の感情の起伏を一句に表すことによりしております。心身ともに明るく日は、

“ 弾む日は赤きカンナの色を着る ”

また、ある時一瞬至福を感じた時などは、

“ 寝返れば香りの淡 菊枕 ”

今は亡き夫の五年余りの看病生活時には、

“ 看取り夜の瓦斯火の青し寒厨 ”

晩年となれば時折、故郷が恋しく懐かしく、

“ 懐郷は夜店の灯より迫り来る ”

そして現在の時々不意に淋しさが身に迫ってくる夜があります。

“ 花冷えやひとり注ぎ足す夜のワイン ”

“ 咳き込めばひとりの闇の揺れ動く ”

などなど、私の俳句は日常生活の「ありさま」を詠んでおりますが、観光ボランティアガイド活動のおかげで、『吟行句会』の方のガイドをさせて頂いた折には、後日お礼状と共に俳誌を送っていただきました。それぞれの句会の特色のある俳誌は私の句作の「糧」になっており、感謝しています。

これからの彩の少ない残生に「俳句」は私の「こころの灯」としてこれからも拙句を詠み続けていきたいと思っております。

